

2016年京都シンポジウム

女性が描く

「いのちのふるさと海と生きる」

開催日時：平成28年8月20日（土）13時～17時

開催場所：京都大学医学部芝蘭会館 稲盛ホール

主 催

一般社団法人全国日本学士会・舞根森里海研究所

企画の趣旨

海は、私達のいのちの究極のふるさとです。

東日本大震災は甚大な被害と引き換えに、「いのち」のありようを根元的に見つめ直す機会となりました。20世紀後半に、日本は著しい経済成長を成し遂げた半面、この間、いのちの源である水を循環させる海へ理不尽な負担をかけ続け、「いのち」に関わる多くの大切なものを失くしてきました。

なかでも、命がわき出る“宝の海”であった有明海を、司法も巻き込み混迷するばかりの“瀕死の海”に至らしめ、日本周辺から海辺で元気に遊び学ぶ子どもたちの姿を消し去ってしまいました。

東日本大震災が私たちにもたらした最も深刻な悲劇は、多くの人々から“ふるさと”を強制的に奪い去ったことであり、その大部分は「人災」と呼ぶべき悲劇であった点です。

時代は、お金と物で動き、ところや環境（自然）を壊し続け、それらの負債を“断りなく”続く世代に丸投げしかねない無責任な「物質文明」社会を根本的に見直し、すべての“いのち”が大切にされる「環境・生命文明」社会へと踏み出せるかが大きく問われています。

硬直化した縦割りの組織と思考に縛られた社会を、より柔軟で多様性にあふれた本来の人間らしい社会に戻すには、母性の感性、知性、楽天性、行動力が不可欠です。

「いのちのふるさと海と生きる」をメインテーマに、昨年7月に実施しました京都シンポジウムの趣旨を引き継ぎ、いのちの巡りにより深く関わり、感性豊かな女性の皆さんが描く東京シンポジウムを9月に開催いたしました。

その流れを大切に、本年8月に京都で本シンポジウムを開催することに致しました。「いのち」への感性豊かな女性の皆さんによる多様な話題から、今を生きる私達が未来（続く世代）に何を残せるかを、海から離れた京都で考えたいと思います。

平成 28 年 8 月 20 日

2016年京都シンポジウム 女性が描く「いのちのふるさと海と生きる」実行委員会

委員長 田中 克：舞根森里海研究所所長・京都大学名誉教授

事務局 岡田和男：一般社団法人全国日本学士会専務理事・事務局長

一般社団法人全国日本学士会・舞根森里海研究所共催

2016年京都シンポジウム

女性が描く「いのちのふるさと海と生きる」

プログラム

開催日時：平成28年8月20日（土）13時～17時（受付：12時30分～）

開催場所：京都大学医学部 芝蘭会館 稲盛ホール

（京都市左京区吉田近衛町 京都大学医学部構内）

I 趣旨説明（13時～13時10分）

女性が描く「いのちのふるさと海と生きる」

京都大学名誉教授・舞根森里海研究所所長 田中 克

II 基調講演（13時10分～14時）

「水を巡る地球環境安全保障」

総合地球環境学研究所准教授 遠藤 愛子

III パネル討論（14時～15時50分）

話題提供1：いのち「環境問題の本質としてのいのち」（14：00～14：20）

NPO 法人環境市民理事 下村 委津子

話題提供2：ふるさと「日本の心のふるさと京都の文化」（14：20分～14：40）

（株）聖護院八ッ橋総本店専務 鈴鹿 可奈子

話題提供3：海「生きることを学ぶ学校としての海」（14：40～15：00）

海の幼稚園主催 小野寺 愛

（休憩：15時～15時10分）

話題提供4：共に生きる「海と遊び未来を拓く」（15：10～15：30）

海島遊民くらぶ代表・旅館海月女将 江崎 貴久

話題提供5：地方創生「鈴鹿山脈から琵琶湖までつながる地方創生」

（15：30～15：50）

東近江市森と水政策課課長補佐 山口 美知子

IV 総合討論（15時55分～17時00分）

○講演者と参加者との懇親会：17時30分～19時30分 於：京都大学楽友会館

シンポジウム終了後、講演者を交えた懇親会を催します。会費は2,000円です。

○問合せ先：一般社団法人 全国日本学士会事務局

Tel：075(724)6500 Fax：075(722)3002 e-mail：gakusi@poppy.ocn.ne.jp

講演者プロフィール・講演要旨

遠 藤 愛 子 氏

総合地球環境学研究所 准教授

【プロフィール】

1967年、滋賀県生まれ。2003年にプリマス大学大学院理学研究科沿岸・海洋政策コース修士課程修了、2008年に広島大学大学院生物圏科学研究科博士課程後期修了。

東京国税局国税専門官、海洋政策研究財団研究員を経て、2013年に総合地球環境学研究所(地球研)に入所。現職は同研究所准教授。地球研プロジェクト「アジア環太平洋地域の人間環境安全保障：水・エネルギー・食料連環（ネクサス）」のリーダーを務める。

専門は水産経済学と海洋政策学。これまで沿岸域が抱える問題を解決するために、学際的・分野横断的な調査研究を行ない、政策提言を実施するプロジェクトに参画。科学と社会の連携のもと、地域と世界をつなぐガバナンスのあり方を追求中。

著書には、『捕鯨の文化人類学』（成山堂 2012、分担執筆）、『日本の漁村・水産業の多面的機能』（北斗書房 2009、分担執筆）などがある。

【基調講演：「水を巡る地球環境安全保障」要旨】

2012年にリオ・デジャネイロで開催された国連持続可能な開発会議において提唱されたグリーン経済に貢献することを目的に、2011年、ドイツ連邦政府主導により「水・エネルギー・食料・安全保障・ネクサス会議」がボンで開催された。本会議を契機にネクサス・コンセプトが国際社会で積極的に取り上げられるようになった。

「ネクサス」とは、国語辞典によると、「関連、結合、結びつき」という意味であり、英和辞典では、「きずな、つながり、結びつき、関係、関連、連結手段」、「関連性のあるひと続きのもの（集合体）」を意味する。水・エネルギー・食料ネクサスとは、それぞれの資源間のつながりや、水・エネルギー・食料資源のつながりの集合体と解釈できる。

ネクサス・コンセプトが国際社会で議論されるようになった背景として、気候変動と、人口増加・経済発展・グローバル化・都市化等の社会的変化が、水・エネルギー・食料資源にますます圧力かけるようになったこと、3つの資源が相互に複雑に関係・依存していることから、資源間のトレードオフ及びこれらの資源の利用者間のコンフリクトが顕著になってきたことがあげられる。そこで、相互に関係・依存した資源システムの複雑性を理解し、異なる分野やス

ケールでの関係者の協力を促すことで持続可能な社会の実現を目指すネクサス・アプローチが注目されるようになった。

米国国家情報会議「グローバル・トレンド 2030：未来の姿」によると、水・エネルギー・食料の需要は、2030年までに単独でそれぞれ40%、50%、30%増加すると見積もられている。2016年1月に世界経済フォーラムにより発表されたグローバル・リスク報告書では、2016年に最も潜在的影響が大きいグローバル・リスクとして、水危機、食料危機、エネルギー価格ショックが特定されており、さらに同報告書で紹介されているリスク同士の相互関連マップにおいても、水危機、食料危機、エネルギー価格ショックが直接的・間接的に相互に関連するリスクとして確認されている。

本日は、「水・エネルギー・食料ネクサス」を、「いのち」「ふるさと」「海」「生きる」の視点から捉え直すことにチャレンジする。

下村 委津子 氏

認定 NPO 法人環境市民理事

フリーランスアナウンサー

【プロフィール】

「年齢性別を問わず、生命あるものすべての存在が価値あるものとして大切にされ、安全に安心して生き活きと暮らせる環境を大切にしたいまち」の誕生を目指して活動中。また、環境の専門性をもったパーソナリティとして、まちづくりや環境番組の企画や放送に携わる。

環境市民ではグリーンコンシューマー活動をさらに深化させた「消費から持続可能な社会を創る市民ネットワーク」による持続可能な消費と生産に関するプロジェクトや、持続可能な地域社会をパートナーシップでつくることを目的にした「環境首都創造 NGO 全国ネットワーク」で活動している。

グリーン購入ネットワーク (GPN) 理事、NPO 法人 FEE Japan 理事、NPO 法人持続可能な開発のための教育推進会議 (ESD-J) 理事、NPO 法人アントレプレナーシップ開発センター理事、市民エネルギー京都理事。

【話題提供 1 : いのち「環境問題の本質としてのいのち」要旨】

地球上には、これまで命が溢れていました。命を育む自然という装置が正常に機能できていたからです。それが今、危機的状況に陥っています。アメリカの気候学者ギャビン・シュミット氏が「今年は観測史上最も気温が高い年になる」と Twitter でつぶやいたことがニュースにもなりました。また、現実にも各国でも異常気象が多発し、その被害も大きくなっています。これだけ異常気象が起きるといって自体が異常です。これらの問題は人為的起源による可能性が極めて高い (95%以上) と IPCC 第5次報告書では記されています。

昨年12月に採択された気候変動枠組条約締約国会議 (COP21) で採択されたパリ協定では、これまでいわれていた2°C未満から、さらに1.5°C未満に抑える努力をすることが求められました。このままでは事態はさらに悪化し人類の生存にかかわるレベルに達すると予想されるからです。

さて、私たちは地球上の多くの他の生物の命によって生かされています。しかし、実際に生活の中で実感している人はどれくらいいるのでしょうか。食べ物、衣類、薬、日用品、私たちが日常の暮らしの中で必要とするこれらのものは、他の生物の命があるからこそ得られるもので

す。その命と暮らしとのつながりが見えないままだと、大自然のなかにいるときは感じられたことも、日常生活に戻ったとたん忘れられてしまいます。

環境政策の先進的な事例調査のために、これまで何度もドイツのまちを訪問しました。地域の中の自然を回復・復元させるためのプロジェクトでは近自然工法（日本でいわれる工法とは違い自然と同化します）が用いられていました。住民との徹底した対話と合意形成で民主的なプロセスが大切にされ、都市計画と自然回復のための政策は密接につながっていました。また、子どもたちの環境学習についても調査しましたが、単なる体験学習だけではなく、体験を通して生物多様性と暮らしのつながりを感じたり考えたりできるプログラムがいくつもありました。環境市民でも生物多様性と暮らしのつながりが感じられる学習プログラムを開発しています。海外の事例も含めて紹介します。

私たちは、環境問題を解決したいのではなく、環境問題が起きないように社会をめざしています。

最後に、私たち人間は、自然の回復をサポートすることはできても、自然を創り出すことはできません。再認識することが必要だと強く思います。

IPCC

世界気象機関(WMO)及び国連環境計画(UNEP)により 1988 年に設立された国連の組織で、国の政府から推薦された科学者の参加のもと、地球温暖化に関する科学的・技術的・社会経済的な評価を行い、得られた知見を政策決定者をはじめ広く一般に利用してもらうことを任務としている。

最高決議機関である総会、3つの作業部会（科学的根拠／影響、適応、脆弱性／緩和策）及びインベントリー・タスクフォースから構成

鈴 鹿 可奈子 氏

(株) 聖護院八ッ橋総本店専務

【プロフィール】

京都市生まれ。京都大学経済学部経済学科卒業、在学中カリフォルニア大学サンディエゴ校エクステンションにて Pre-MBA 取得。

卒業後、信用調査会社勤務を経て、2006 年聖護院八ッ橋総本店入社。

「守るべきことを守ること、続けていくことが大事」という父・鈴鹿且久社長のもと、長い歴史と伝統の味を守り受けつぎながらも、新しい商品づくりに日々努めている。

2011 年には新しい形で八ッ橋を提供する新ブランド「nikiniki (ニキニキ)」を立ち上げた。現在、専務取締役。

【話題提供 2 : ふるさと「日本の心のふるさと京都の文化」要旨】

- 1) 京都で生まれてきて、海に対する考え方
- 2) 海遍路を通じて、海との関わり方の変化
- 3) 海を知る、川を知るための現在の活動について

小野寺 愛 氏

海の幼稚園主催

一般社団法人「そっか」共同代表

一般社団法人「エディブル・スクールヤード・ジャパン」アンバサダー

【プロフィール】

横浜生まれ、上智大学外国語学部英語学科卒業。神奈川県逗子市在住、三児の母。

旅とウィンドサーフィンに明け暮れた学生時代、外資系証券会社勤務、国際交流 NGO「ピースポート」勤務、船上のモンテッソーリ保育園「ピースポート子どもの家」運営を経て、現在、「子ども×自然×地域活性」をテーマとする一般社団法人「そっか」の共同代表。

「エディブル・スクールヤード・ジャパン」のアンバサダーとして、全国にエディブル・エデュケーション（栽培から食卓までのつながり全体をいのちの教育と位置づけて行う食育）を広めている。三浦半島では「パーマカルチャー母ちゃん」として、小学校での大豆教室、映画上映会や、農園ピクニックなど、パーマカルチャー的暮らしを体験する場をコーディネート。逗子市立久木小学校では地域の親子と放課後菜園を運営し、農園併設型保育園「ごかんのもり」では関東全域から参加者を募り、実践型のワークショップを運営している。

教育プログラムコーディネーターとして地球を9周し、のべ約6000人の人々と共に世界を旅する中で出会った「平和は子どもからはじまる」が信条。すべての大人が「私の子どもから私たちの子どもたちへ」と発想と行動を転換することがこれからの社会の鍵だと信じて、国内外で人のつながりを紡いでいる。

【話題提供3：海『生きることを学ぶ学校としての海

～「私の子ども」から「私たちの子どもたち」へ』要旨】

足下の自然から暮らしが切り離され、人間本来の分かち合いの場だった「地域」が弱くなっている都市生活。町の将来を「消費」と「個」の強さに依存するのではなく、暮らしの中に「共有の機会」をつくることで、利便性と引き換えに失いかけたものを、楽しみながら揺り戻すことができなにか。そう考えて、神奈川県逗子市にて、一般社団法人「そっか」をはじめました。

「そっか」の活動をひとこと言えば、「人間活動の町内会」、または「海と山の子ども会」。空き地や学校に畑を作り、荒れた竹林を公園に変身させ、川の水源地探しの冒険に出かけ、放課

後の居場所を海に作り… 足下（音読みで「そっか」）の自然を楽しみながら「見たい町の変化に、自分自身になる」ということを、大人も子どももはじめよう。それも、自分ひとりではなく皆と一緒に。 という趣旨で、活動を続けています。

海がテーマとなる本シンポジウムでは、活動の中でもとくに、小学生放課後の海の学校「黒門とびうおクラブ」、未就学児親子で行う自主保育「海のようにちえん」の活動報告を中心にお話します。

江崎 貴久 氏

海島遊民くらぶ代表・旅館海月女将

【プロフィール】

京都外国語大学外国語学部英米語学科卒業後、1996年エトワール海渡東京本社就職、1年後、有限会社 菊乃設立、代表取締役就任。観光業の本来あるべき姿を見直し、地産地消を基本に、海月の経営を開始。

2000年には、有志とともに(有)オズとして「海島遊民くらぶ」を立ち上げ、鳥羽らしさの最も残った地域である離島をフィールドに自然や生活文化を通して環境と観光、教育と環境を一体化させたエコツアーを展開。

現在、観光や環境に関わる行政委員や、地元の鳥羽市エコツーリズム推進協議会会長を務め、鳥羽市や観光協会の新たな指針の下、地域の漁観連携を進めております。また次世代のリーダー・人材育成・地域全体での資源活用のあり方を研究しながら実践するとともに、各地の地域の活性化に取り組んでいる。

【話題提供4：共に生きる「海と遊び未来を拓く」要旨】

地域において海洋資源はこれまで主に水産資源として活用されてきた。

しかし、近年、生活の都市化や過疎化が進むにつれ、自然とのなじみが薄れつつある中で、人々と自然の接点を意図的に演出する必要性が高まってきている。さらに、海辺への理解が低くなるとともに沿岸地域の地方経済の疲弊も顕著になってきた。

こうした課題解決の一つとして、地域振興を目的に観光資源としてや教育資源としての「海」の活用に期待が集まっている。観光と環境と教育を複合的に組み合わせながら、地域の中で観光をどう活用するかという観点から「漁業と観光」や「島っ子ガイド」についての話題提供を行う。

山口 美知子 氏

海東近江市森と水政策課 課長補佐

【プロフィール】

滋賀県生まれ。東京農工大学大学院修了。1998年に林業技師として滋賀県入庁。林業事務所、琵琶湖環境政策室などを経て、2012年3月滋賀県を退職し、東近江市職員となる。その他、滋賀地方自治研究センター、一般社団法人 kikito、NPO 法人カーボンシンク、NPO 法人まちづくりネット東近江、びわ湖の森の生き物研究会、マザーレイクフォーラム運営委員等の活動に参加。

【話題提供5：地方創生「鈴鹿山脈から琵琶湖までつながる

地方創生」要旨】

東近江市は、1市6町が合併したことにより、鈴鹿山系から琵琶湖まで一つの水系を所管するまちとなりました。市面積の56%を占める森林は、水源の森として、また資源の森としてこのまちを支えてきました。その森林から生まれ、流域をつなぐ「水」は、流域の生活を支え、農業や水産業などの一次産業だけでなく、多くの企業にも生命線となっています。つまり、「森」と「水」を持続可能なまちづくりにつなげることは、東近江市の重要な使命であります。

東近江市では、昨年4月から市民環境部に「森と水政策課」を新たに設置し、具体的な取り組みの検討をスタートしました。木材価格の低迷や獣害など、地域の自然環境が抱える課題は深刻であり、人との関わりも激変しました。しかし、上流と下流が自然と共生することの意義を共有することができれば、解決策は見出されるはずです。その検討の第一歩として、森と水政策課では4つの取り組み方針を掲げています。

1. 森林資源の賢明な利用（資源活用の事業化）

地域資源を見直し、東近江市の特徴を生かした付加価値向上につなげます。

2. 人と自然のつながり再生

森里川海のつながりとその豊かさを知り、生かす施策を進めます。

3. 循環共生型のまちづくりの実現

「低炭素・循環・自然共生」を統合的に実現するまちづくりを進めます。

4. 次世代育成

まちづくりを担う次の世代が、人と自然の共生を体験・学習する機会を増やします。

趣旨説明の紹介

田 中 克 氏

京都大学名誉教授

舞根森里海研究所所長

1943年滋賀県大津市生まれ。京都大学大学院農学研究科博士課程修了。農学博士。水産庁西海区水産研究所研究員、京都大学農学部助教授を経て、同大学院農学研究科教授。2003年京都大学フィールド科学教育研究センター長。2007年マレーシアサバ大学ボルネオ海洋研究所客員教授。2010年より（財）国際高等研究所チーフリサーチフェロー。

この間、水産生物学、特に沿岸性魚類の初期生態を研究し、それを基盤にして森から海までの多様なつながりとその再生を目的とする新たな統合学問「森里海連環学」を2003年に提唱。国民的社会運動「森は海の恋人」と連携し、日本の沿岸環境再生の試金石である有明海における森里海連環研究ならびに気仙沼舞根湾における3/11巨大地震と津波が沿岸生態系に及ぼした影響と回復過程に関する研究を進める。

現在、舞根森里海研究所所長、NPO法人森は海の恋人理事、NPO法人ものづくり生命文明機構理事

主な著書：魚類学下（1998年、共著）、森里海連環学（2007年、共著）、森里海連環学への道（2008年）、稚魚一生残と変態の生理生態学（2009年、編集）、水産の21世紀—海から拓く食料自給（2010年、編集）、森と海を結ぶ川（2012年、共著）など

【メ モ】

アンケートのお願い

本日は、2016年京都シンポジウム 女性が描く「いのちのふるさと海と生きる」にご参加いただきありがとうございました。

本会におきましては、本シンポジウムの内容を、本会会誌アカデミアNo.158 2016.10に掲載し、広く配布いたしたいと考えております。

また、本日のシンポジウムに参加された皆様方のご感想、ご意見等も合わせて掲載させていただきたく、つきましては、裏面にご自由にご記入いただければと存じます。

なお、会誌への掲載を望まれない方は、その旨記載願います。

おって、会誌をご希望の方は、お送り先をご記入いただければ、無料にてお送りいたします。

アンケート

会誌の送付を、希望する。 希望しない。

お送り先 住所：〒

宛名：

よろしければ、ご記入願います。

性別： 女性 男性

年齢： 20歳代 30歳代 40歳代 50歳代 60歳代
70歳以上

ご住所： 京都市府内 近畿圏内（ ） その他（ ）

本シンポジウムの開催を何でお知りになりましたか

チラシ 知人 新聞 HP その他（ ）

○本日のシンポジウムの感想、意見、参加された動機等をご自由にお書き下さい。

（ 感想等の本会会誌への掲載を望まれない方は、内にチェックを入れてください。）

※ご協力ありがとうございました。

質 問 ・ 意 見

各講演へのご質問、ご意見等がございましたら、下記にご記入の上、総合討論の前までに、会場内に設置の「質問箱」へ投函願います。